

中国人と日本人の文化的異質性

The Differences of Cultural Characteristics between The Chinese and The Japanese

孫 勝 強

SUN Shengqiang

要約

中国人と日本人は、いわゆる“一衣帯水”の隣人同士であり、皮膚の色が同じであるばかりでなく、同じ漢字を使いながら、実際にお互いに相手のことを知らなすぎるところが多い。一国の国民性は他の国の人びとからみれば、大変理解しにくいことがある。

本稿では「恥の文化」と「名の文化」および「死生観」における中国人と日本人の文化的異質性の視座から、両国の文化や風俗・習慣などを取り上げ考えてみたい。

キーワード

恥の文化、名の文化、死生観

1. はじめに

1980年以降、日中両国経済交流が、目覚ましい発展を遂げるにつれて、留学、旅行、姉妹都市間交流など両国間での人的交流の幅も層も急速に拡大している。しかしその陰で、各種の感情的、心理的な摩擦やトラブルが起きているのも事実である。日中間での現実の交流と協力が空前のレベルまで拡大しているのに、そうした摩擦やトラブルなどが今になって表面化しつつあるのはなぜか。政治的、歴史的な原因があるのは言うまでもないが、筆者にはそれ以外に文化的な要素が大きく影響しているように思う。振り返ってみると、1970年代の日中国交正常化当初、確かに相手に対する好感度が両国でともに高かった。ただ当時、両国の大半の国民は実際の交流に参加できず、書物や思い入れだけで相手への「親近感」が形成されていた。その後、両国民同士の直接の交流が増え、対話が進むことになっが、「同文同種」物差しで相手をはかることで、お互いの思考様式、社会習慣ないし生活習慣がいかに違うかを「発見」し驚くことになった。さらに違いを認め合う心理ができていないため、認識ギャップが戸惑いから反感へ増幅されてしまう構造にある。その「思い違い」はいろいろな面に現れているが、本稿では身近に感じた中国人と日本人の「生と死」や「名と恥」に対する文化的異質性の視座から、両国の文化や風俗・習慣などを取り上げ考えてみたい。

2. 「恥」の文化

日本研究において鋭い考証によっていまでも高い評価を受けているのに、ルース・ベネディクト女史の『菊と刀』がある。そのベネディクト女史によると、文化に次の二つのパターンがある。

文化 { 罪の文化→西欧人の文化
恥の文化→日本人の文化

その著書の第十章の中で、ベネディクト女史は「罪の文化においては人びとは内部の良心の

働きにもとづき、罪の自覚をもちつつ、善行をおこなう。恥の文化においては人びとは外部の世間からの強制にもとづき、恥をかかないように、善行をおこなう。」と分析している。

日本人を恥の文化の代表とみている彼女は、日本人が罪の意識よりも恥の意識を重視するのは武士階級成立以後の伝統と幼児期から恥を強調する教育を続けて来たためとみている。日本語で「恥を知る人」は「有徳の人」、「名誉を重んじる人」の意味である。いまでも「この恥らず！」という男を侮辱する言葉がある。成人の男児に対するののしり言葉としては、相当に痛烈な表現である。この言葉から派生して「恥を知れ！」という言葉もよく耳に入る。それを言われたら、大抵の日本人は相手にそれに見合う行動をとって、恥を知る証しを示すである。「死をもって」というのはその選択肢の一つである。たとえ自殺するほど極端ではなくても、日本の社会では、企業や組織で大きな失敗があった場合、あるいは部下が犯罪を犯したり、いわゆる破廉恥なことをしたときにはその企業や組織の責任者は、「腹を切って、責任をとる」という習慣がある。もちろん21世紀を迎えよとしている今日、「腹切り」などという行為が許されるわけではない。「腹を切る」とは、責任を取って辞職することである。

この手のニュースがときおりマスコミを賑わすのは、「恥を知る」という日本人独特の性格のためであろう。卑近の例としては、リコールにつながるクレーム情報を隠していたために責任を取って辞職した三菱自動車工業の某前社長がいる。

企業が失敗したとか、公的機関で事件を起こしたとか、部下が破廉恥なことをしてしまったとかというようなケースでは、「罪」の意識をもち、そのようなことが二度と起きないように部下を指導するのが、リーダーである者の取るべき態度である。話がちょっと逸れるが、「罪」の文化の担い手である西欧人の感覚はどうであるかと言うと、部下が悪いことをしたのに、上司は辞める理由はない。そんなときに辞任するのは職場放棄に等しい。そのときには、「罪」のためにも、責任者は一層奮励努力すべきだというのである。だが、日本の社会では、西欧的なやり方は通用しない。それはいたずらに「恥の上塗りをする」ように批判されている。

日本人のタテ社会を支える重要な要素の一つは、「人の上に立つものは、部下がへまをしでかしたときには、泥を被って責任を取る。」ということである。このような心理が、ベネディクトの言う「恥の文化」を作り上げたのである。

3. 「名」の文化

日本人が「恥」を強調するのに対して、中国人は、「名」を重視する。この場合の「名」とは、面子のことである。『孟子』の尽心編にこんな警句が残されている。

「名を好む人は、能く千乗の国を譲る。（“好名之人能讓千乗之国”）」

名声を重んじる人間は、自分の名誉を守るためには、たとえ千輛の戦車を出すほどの大国も人に譲って惜しまない、という意味である。このように、中国人は昔から“名”を重んじた。その「名」を守るためには、物質的な犠牲をいくら払っても惜しくないと感じていた。中国人の名を惜しむことは、日本人の恥を知るのと同工異曲（手ぎわは同じであるが、とらえ方・趣が違うこと）であるが、心理的にはもう少し範囲が広い。名を惜しむ気持ちの中には恥を知る心は含まれると思う。この意味では、中国の文化は「名」の文化（恥の文化を含む）と言えよう。

ところで、名を惜しむ心理から派生したものに中国人独特の「面子」の問題がある。中国人は「面子」を極端に重んじる民族である。「面子」はそのまま日本語になっていて、『メンツ【面

子】体面。面目。「～を重んじる」？中国語から。（『岩波国語辞典』第三版、一九七九年）と辞書にも収められている。

例えば、中国語で“有面子”と言えば、「体面がいい」、「顔をたててくれた」という意味であり、“没有面子”と言えば、「顔がつぶされた」、「みっともない」というほどの意味である。日本でもやくざとか暴力団などは、「てめえ、よくもおれの顔をつぶしてくれたな！」とって凄んだりするが、一般にそれほど問題にしないものである。

ところが、中国人社会では、対人関係のうえで、この“面子”問題がクローズ・アップされる。いろいろなケースがあるが、分かりやすくするために、就職のことを例に例えることにする。有力者Aが企業の人事関係者Bに就職希望者Cを紹介し、BがCを採用した場合、実際の採用理由はCの人格・能力・経歴などにあつて、Aが口をきいたことは全然影響しないときでも、中国人の社会では、普通は「BはAに面子を与えた」と解釈する。Aも“有面子”になって喜ぶ。逆にせっかく採用されたCが、何かへまをやつて退職させられたときには、「CはAの面子をつぶした」と言われる。Aにとっては、“没有面子”であるから、恥をかいたことになる。これが、中国人の一般の“面子”に対する考え方である。

既述のように、日本の会社や組織では、部下が重大な失敗をやらかしたときに、その上司が責任を取つて辞任するケースが多い。また、子供が破廉恥な犯罪を犯したとき、親がその責めを負つて勤務先を辞めることもある。とくに親が公務員、警察官、教師など公職についているとき、あるいは社会的に有名なときには、ほとんど例外なく辞任する。これが日本的な「責任の取り方」である。

これに対して、名を重んじる中国人は、トップの責任というものには、現実的な対応をする。会社や組織の内では、部下が重大な失敗を犯したときに、その部下がトップの面子をつぶしたわけだから、その部下はツメ腹を切つてもしかたないが、トップが辞める必要は少しもない。トップはその企業と同じく被害者の立場であり、部下の首を切つても自分が首を切られる理由はない。恥を感じるどころか、自分の失敗や責任でも、それを部下に転嫁して、自分だけがその失敗や責任から逃れようとする悪ケースさえあるくらいである。この責任感覚は往々にして、あきらかにトップの責任とみられる失敗に対しても、一種の「トップ無責任」に発展する。また、周囲も、この問題に対しては、トップの面子を重んじる余り、比較的寛大であり、それほど深く追求することはしない。その証拠に、中国の行政の長や企業のトップなどは、いかなる場合でも上から「辞めてくれ」と言われぬかぎり絶対辞めない。既に十年以上たっている天安門事件の張本人が現在もまだ重要なポストに居座っている。先日、「愛人スキャンダル」などを追求されて辞任した現森政権の中川官房長官の記者会見を見ると、少し感慨深いものを感じる。

4. 中国人の死生観

日本には伝統的に敵でも悪人でも死んだら仏になるというコンセンサがあるが、中国には善と悪の烙印を百年も千年も押し続ける傾向がある。中国人にとって現世も来世もそう変わりはない。人は死んだからといって神や仏になるわけではない。中国には“生死一如”という言葉があるように、死んだからといって、負債や責任が帳消しされるわけではないし、この世で不義をしたからあの世で御恩返しを、という訳にはいかないのである。『論語』の先進編で弟子の子路が、神々にはどういう態度で仕えるべきだと聞いたところ、孔子はこう言った。「神様に仕

えることより、まず人に仕えることを考えなさい」（“未能事人焉能事鬼”）子路は更に尋ねた。「では、死とは一体何でしょうか」（“敢問死”）すると、孔子はきっぱりと答えた。「未だ生を知らず、いづくんぞ死を知らん。」（“未知生焉知死”）生きる意味さえつかめないのに死の意味を理解できるわけではない、ということである。またこの言葉は、まさに「生」こそがすべてであって、「死」を考えることは無駄である、と解釈することもできるであろう。いかに立派に生きるかが大事であって、来世に夢を託すのは間違いだというのが中国人の思惟様式であったといえよう。

「生と死」に対して、このように冷めた感覚をもつ中国人が自殺することは日本よりずっと少ない。バブルで倒産した企業の責任者が「死んでお詫びする」という行為が多発しているが、それを責任回避とみなす中国人は多いであろう。世にいじめられたので、「死んでやる」と言った自殺者に対し、同情するけど理解できないことである。死んだら負けというのがその理由であろう。

一方、日本人は「来世」に対して大きな期待を持つ。現世の生活がいくら苦しくても、いや現実の暮らしが辛ければ辛いほど人びとは死後の世界に夢と希望を託する。だから、この世ではどうにもならないと感じた時には、自ら生命を断ち切って、来世に幸福を求めるのである。

「心中」という行為はその例の一つであろう。日本語には情死のほか親子心中、主従心中などの表現があるが、それを中国語に訳す場合は大変苦勞する。なぜかという、「心中」と「情死」は日本独特のものである。

中国語の諺に「棺を蓋いて事定まる」（“蓋棺事定”）というのがある。人間は死んで棺おけに入れられて初めて真の評価が下される。つまり歴史が公平に評価してくれる、という意味である。その場合、善と評価されたらいいが、悪と評価されたら死んでも悪人は悪人だから批判されるべきであり、糾弾せねばならないというのが中国人の考えである。中国の改革開放路線を提唱し、進めて来た最高実力者の鄧小平氏はその善の例であり、プロレタリア文化大革命で悪名高い“四人組”は間違いなくその悪の例であろう。

中国人ならだれでも知っている英雄伝の一つとして、将軍岳飛の物語りが挙げられる。その物語りに南宋の宰相で、秦桧という人物が登場する。彼は敵国の金に対して、宥和政策を唱えた人物である。この政策を推進するために彼は、タカ派の将軍岳飛をだまして前線から呼び戻して殺害した。後世、抗戦を主張した岳飛は“尽忠報国”の英雄として賛美され、反対に、投降を主張した秦桧は極悪非道の売国奴と評価されてきた。

今でも、安徽省にある秦桧の墓碑には線香や花はおろか、つばがいっぱい吐きかけられ、通行人が墓石を蹴とばしていくことは日常茶飯事である。一方、同じ安徽省の杭州市の郊外に雄大な岳飛廟が建っている。杭州を訪れる中国人観光客が必ずと言ってよいほどお参りに行く観光スポットになっいる。岳飛墓の前に秦桧夫婦のひざまずいた鉄の像がおかれている。参詣者は備え付けの鞭で、その像を叩いても構わないことになっている。私もそうした場面に遭遇したことがある。

5. 日本人の死生観

日本の歴史上、極悪人と見なされた人物や民衆から憎まれた人物で、神社に祭られた者もいる。希代の逆臣とされた足利尊氏をまつた足利神社はその一つである。また、単独の神社こそないものの、ドロボウの大将の石川五右衛門、民衆から憎まれた吉良上野芥、朝敵とされた

僧の道鏡でさえも、一部の地方では神として祭られているそうである。現在の例をあげると、A級戦犯の東条英機などを合祀している靖国神社もそうである。一部の閣僚や政治家たちが靖国神社を参拝することを、中国人は「第二次世界大戦で被害を受けた中国人の感情を逆なでするような行動だ」と不快視する。今年の八月十五日の終戦記念日に森田運輸相が閣僚として靖国神社を参拝した。北京・上海間の高速度鉄道建設計画を話し合うため中国を訪問することが九月に予定されていたが、中国側が日程を理由に受け入れを延期していた。結局、訪中実現したのは十一月に入ってからのことであった。延期理由を巡っては、同相ら閣僚の靖国神社問題が関係していたと日本の新聞は報道した。靖国神社参拝問題に対して、「いくら戦犯でも犯罪者でも、死んでしまえばもう罪はない。」というのが日本人一般の感情である。中には中国が歴史カードを使い過ぎたと思う日本人が少なくないであろう。

6. 終わりに

日本人と中国人は、いわゆる“一衣帯水”の隣人同士であり、皮膚の色が同じであるばかりでなく、同じ漢字を使いながら、実際にお互いに相手のことを知らなすぎるところが多い。以上見て来たように、一国の国民性は他の国の人びとからみれば、大変理解しにくいことがある。「恥の文」と「名の文化」の違い、「死生観」の違い、そのほかにまた違うところがある。違うのも当然である。そのためには、大事なことはその違いを直視し、認め合うことである。お互いに相手の文化や風俗習慣などを深く理解し、よく尊重しあい、相手の立場にたって物事を考える思惟プロセスが不可欠である。そうでなければ、いかなる問題でも自然に解決されていくことはない。相互理解こそすべての問題の解決の基礎であり、また最善の方法である、ということが再認識させられる。

《主要参考文献》

- ① ルース・ベネディクト (1976) 『菊と刀』 社会思想社。
- ② 奥村三雄 (1992) 『日本語と日本人』 九州大学出版会。
- ③ 安藤延男 (1982) 『日本人の意識構造』 九州大学出版会。
- ④ 孔 健 (1998) 『中国人とつき合う法』 学生社。
- ⑤ 松本和男 (1987) 『中国人と日本人』 サイマル出版会。